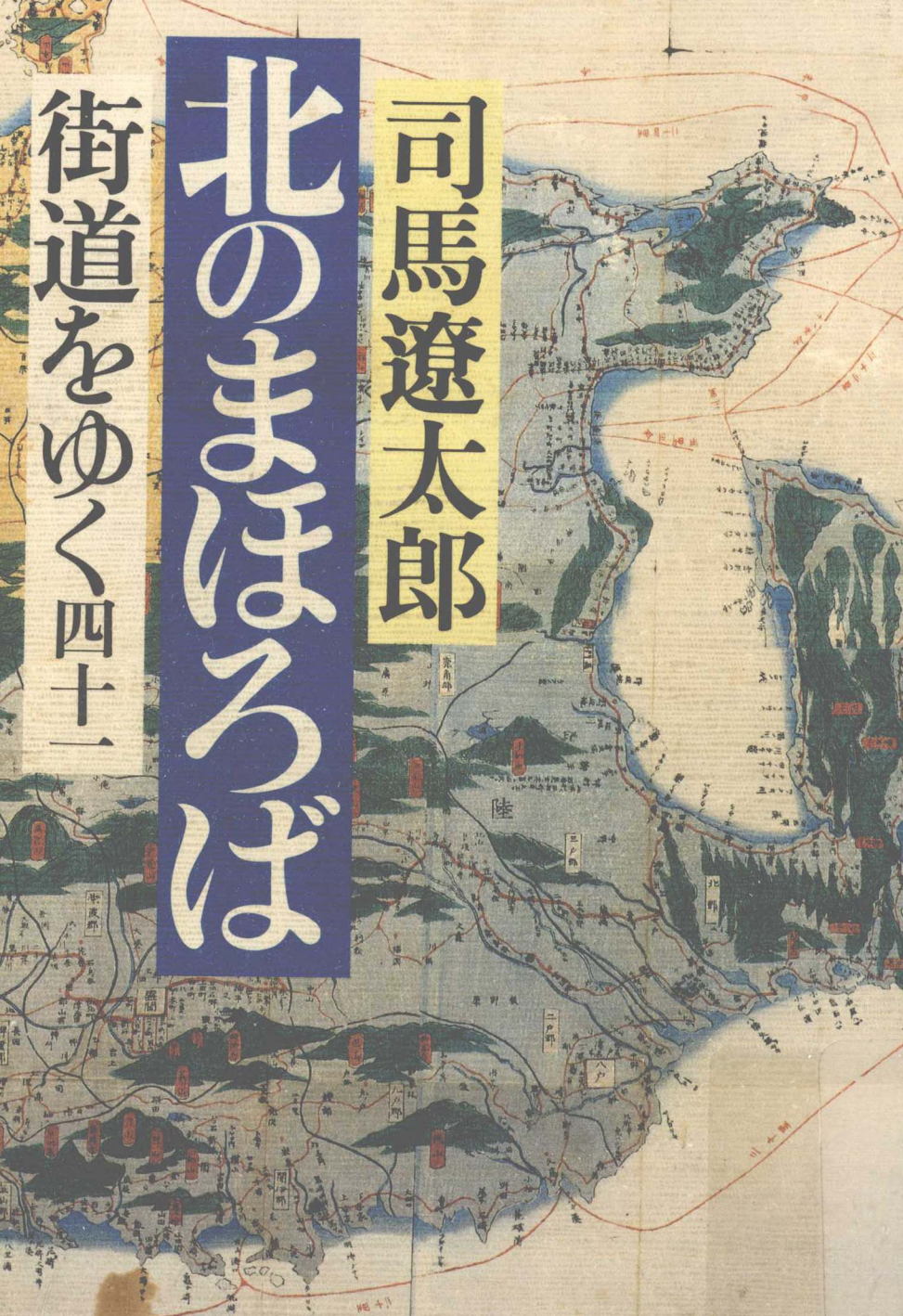


司馬遼太郎

北のまほろば

街道をゆく四十二



街道をゆく
四十一
司馬遼太郎

朝日新聞社

一九九五年十一月一日
一九九五年十二月十日

第一刷発行
第四刷発行

街道をゆく 四十一

著者	司馬遼太郎
発行者	川橋啓一
印刷所	凸版印刷
製本所	青柳製本
発行所	朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地五-三-二
電話 〇三-三五五-〇一三一(代表)
編集・書籍編集部 販売・書籍販売部
振替 〇〇-〇〇-七-一七三〇

定価はカバーに表示してあります

街道をゆく

四十一

北のまほろば

本書には、『週刊朝日』一九九四年五月二十日号、連載第千七十六回から、九五年二月二十四日号・連載第千百一十一回分までを収録。

目次

北のまほろば	
古代の豊かさ	7
陸奥の名のさまざま	21
津軽衆と南部衆	35
津軽の作家たち	49
石坂の『洋サン』	61
弘前城	75
雪の本丸	89
半日高堂ノ話	101

人としての名山

115

満ちあふれる部屋

129

木造駅の怪奇

145

カルコの話

159

鰻ヶ沢

173

十三湖

187

湖畔のしじみ汁

201

金木町見聞記

215

岩木山と富士山

227

翡翠の好み

241

劇的なコメ

255

田村麻呂の絵灯籠

267

二つの雪

281

山上の赤トンボ

293

志功華嚴譜

305

棟方志功の「柵」

319

移ってきた会津藩

331

会津が来た話

343

祭りといえびすめ

355

斗南のひとびと

369

遠き世々

383

鉄が錦になる話

397

恐山近辺

三人の殿輩

蟹田の蟹

義経渡海

竜飛崎

リンゴの涙

409

421

435

449

461

473

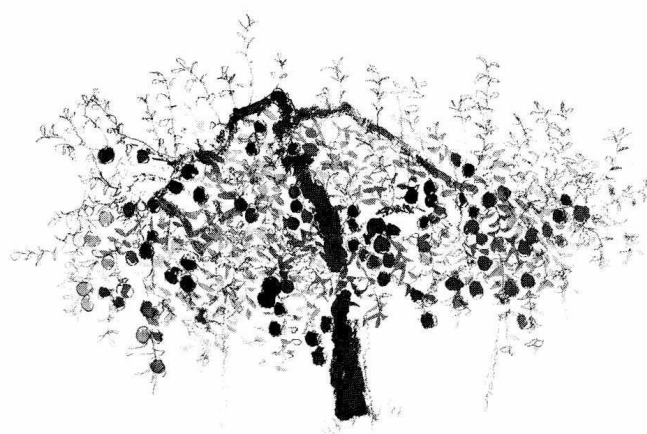
題字 棟方志功

装幀 原弘

え 安野光雅

地図 熊谷博人

古代の豊かさ



ア
ワ
ル
ド
オ
キ

「まほろば」が古語であることは、いうまでもない。

日本に稲作農業がほほひろがったかと思われる古代——五、六世紀ころだろうか——大和(奈良県)を故郷にしていた人——伝説の日本武尊——が、異郷にあつて望郷の思いをこめて、大和のことをそう呼んだ。

語頭のまにいとおしみが籠められている。ほは秀か。穀類の穂のようにツンと高く秀でいるさま。だから高燥の地のことだ、という解釈もある。しかし高燥だと、水田の適地である条件に適にくい。

私は、まほろばとはまろやかな盆地で、まわりが山波にかこまれ、物成りがよく気持のいい野、として理解したい。むろん、そこに沢山に人が住み、穀物がゆたかに稔っていなければならぬ。

倭は 国のまほろば

たたなづく 青垣

山隠れる

倭しうるはし

日本武尊は、『古事記』や『日本書紀』に登場する。伝説の英雄(日本武尊)が、死に臨んで

うたうのである。

伝説のなかのこの人は、大和朝廷の命によって東奔西走した。

年少のころに九州の熊襲くまそを討ち、若くして出雲いずもを討ち、ついには東方十二国の荒ぶる神やまつろわぬ人を討ったという。東国とはいってもまだ縄文のくらしの濃い関東や東北まで尊みことが行ったとおもえない。

病いを得、いまの三重県あたりにきて臥せる。ついに故郷に入ることなく、故郷を恋うあまり、そのくにを「まほろば」とよびかけ、「倭しうるはし」と結ぶ。死の前の漂泊者の心のたかぶりと優しさがこめられている。

ところで、青森県（津軽つがると南部なんぶ、下北しもきた）を歩きながら、今を去る一万年前から二千年前、こんにち縄文の世といわれている先史時代、このあたりはあるいは「北のまほろば」というべき地ちだったのではないかという思いが深くなった。

この紀行の題名については、

「け・か・ち（飢饉の方言）の国が、まほろばか」

と、地元でさえ、異論があるに相違ない。ついでながら、け・か・ちもけ・か・つも、古典に出てくる古い日本語ながら、いまは方言になっている。

太宰治だざいおさむの『津軽』は、その代表作の一つである。

津軽への愛が、ときに含羞になり、自虐になりつつも、作品そのものを津軽という生命に仕上げていて、どの切片を切りとっても、津軽の皮膚や細胞でないものではなく、明治以後の散文の名品とっていい。

その『津軽』にも、当然ながら、飢饉のことがでてくる。作者が、近世津軽の年表を見らうと、飢饉だらけであることに気づく。元和元年（一六六五）大凶、元和二年大凶からはじめて、『津軽』に書き写された凶作の年表はえんえん四ページにおよぶ。

太宰は、故郷を悲しき国としてなげくのである。

……津軽の人でなくても、この年表に接しては溜息をつかざるを得ないだらう。大阪夏の陣、豊臣氏滅亡の元和元年より現在まで約三百三十年の間に、約六十回の凶作があつたのである。まづ五年に一度づつ凶作に見舞はれてゐるといふ勘定になるのである。

そういう国が、なぜ北のまほろばか、ということについて、おいおい説明してゆく。その前に、津軽は青森県のすべてではない。青森県の日本海寄りの水田地帯をさしている。さらにいうと、太平洋岸地方は南部とよばれ、両地方はおなじ県ながら、人情や風習、さらには明治以前の歴史を異にしている。

津軽も、あるいは南部をふくめた青森県ぜんたいが、こんにち考古学者によって縄文時代には、信じがたいほどにゆたかだったと想像されている。

むろん、津軽だけでなく、東日本ぜんたいが、世界でもっとも住みやすそうな地だったらしい。

山や野に木ノ実がゆたかで、三方の海の渚では魚介がとれる。走獣も多く、また季節になると、川を食べもののほうから、身をよじるようにして——サケ・マスのことだが——やってくる。そんな土地は、地球上にぎらにはない。

そのころは、

「けかち」

はなかった。当然なことで、この地方の苦の種でもあった水田がはじまっていなかったのである。

日本の新石器時代は、学者たちがヒトの暮らしへの愛をこめて縄文時代と命名した。

縄文時代とは、いうまでもなく、一万年間（米作が紀元前数百年前に伝来するまで）ほどつづいた先史時代の名称である。

その土器に縄目が刻まれていたことで、そう名づけられた。

土器は、瓶ビンか壺ホツを連想すればよい。

すでに『オホーツク街道』（『街道をゆく』三十八）でふれたように、土器は古代人にとって第

二の胃袋であつた。

それより前の旧石器時代には土器はなかった。このため、食物の幅はかぎられていた。土器という第二の胃袋が発明され、それがひろまることによって、人は、食物をポットに蓄え、ジャーで煮たきできるようになり、たべものの範囲が、ひろくなった。人口もふえた。そういうめでたい時代を、単に新石器時代とよぶのはそっけなさすぎるために、縄文時代とよんでいるのである。

ともかくも、そのよき時代のことを思いながら、青森へ発った。

雪の青森空港に降り、東のほうの八甲田山^{はっこうだえ}と、はるかに裾野をひいて降りてくる大地をみると、

「あのあたりは、あの雪景のまま、縄文の世です」

といわれてもふしぎはなかった。

元旦から二週間たらずを、雪一色の県下ですごした。南部をゆき、津軽をゆき、下北の端まで行った。海だけが遠つ世のように青かった。

幸いなことに、海峡のむこうの札幌から、考古学者の野村崇氏^{たかし}がきてくれた。一昨年、雪のオホーツク街道をともに歩いてくれた人である。この人の笑顔を見ると、そのあたりの空

気までが温くなる。

「鈴木克彦^{かつひこ}さんです、ほら、オホーツク土器の」

と、鈴木さんを紹介してくださった。鈴木さんは、青森県庁につとめる考古学者である。青森県下で、オホーツク土器を見つけた人でもある。遠い世、オホーツク人は青森県下まできていたことになる。このことは、日本人の成り立ちを考える上で、重要なことといわねばならず、私などは以前、このことを知ったときに、

「なぜ青森県下から、あんなに大きくて美しい体形のおすもうさんが出てくるのか、よくわかりましたよ」

と、話を飛躍させておかしがった。力士たちの容貌もいい。隆^{たか}の里^{さと}、旭富士^{あさひふじ}、舞^{まい}の海^{うみ}、貴^{たか}ノ浪^{なみ}などが、共通しておだやかで京人形のような顔をしているのも、なにごとか、遠い時代のことを、さまざまにおもわせるではないか。

ところで、本来しずかなはずの考古学がここ十数年、前代未聞の活況を呈し、過去の定説がつぎつぎにくつがえされている。

私どもの先祖像が、めまぐるしく変わってきているのである。

たとえば縄文遺跡から世界最古の漆器まで出るにおよんで、縄文文化が原始文化ではなく、一万年、数千年の時を経て成熟を遂げた文明ではないか、という考えまで出てきた。